

追放薬師は 人見知り!?

2

川上とむ

Kawakami Tom

illust. jura



???

ルークリッド村の
近くの森に棲む魔物。
人語を理解する、
ミステリアスな狼。

ロヴェル

ルークリッド村で暮らす少年。
とある事情から、
大人に心を
閉ざしている。

オリヴィア

ノーハット伯爵家の令嬢。
淑やかな見た目とは
裏腹に、好奇心
旺盛。

イアン

ノーハット伯爵家の令息。
病弱だが聡明で、
エリン工房の
お得意様。

エリン工房の仲間たち

マイラ

拳闘士の少女。
エネルギーな
性格。

クロエ

商人見習いの少女。
工房を支える
縁の下の力持ち。

ミラベル

魔法に長けた女剣士。
『エリン工房』のオーナーで、
周囲を振り回す
自由人。

レリック

各地を巡る、
商売上手な旅商人。
気さくでフレンドリーなため、
エリンには警戒
されがち。



スフィア

元奴隷の少女。
奴隷商から救われて以来、
エリンを先生と慕う、
可愛い一番弟子。

エリン

実家の工房を追い出された
少女。人見知りな一方、
薬師としては超一流。
腕前を買われ、『エリン工房』の
看板薬師を
務めることに。

登場人物紹介

第一章 薬師、海辺の街に赴く

わたしは薬師エリン・ハーランド。

ミランダ王国の城下町にある、薬師工房で働いている。

その名も『エリン工房』。今でこそ国家公認工房の地位を確立させているけど、ここまでの道のりは決して楽ではなかった。

幼少期に両親を亡くしたわたしは叔父家族に引き取られるも、そこでの暮らしは悲惨そのもの。薬師だった父が立ち上げた『ハーランド工房』は叔父に乗っ取られ、奴隷同然の生活を強いられる日々。いつしかわたしは、極度の人見知りになってしまった。

そんなある日のこと。突然工房を追い出されたわたしを助けてくれたのが、現在の『エリン工房』の仲間たちだった。

魔法剣士で現工房のオーナーのミラベルさんと、商人見習いで工房の経理担当のクロエさん、拳闘士で用心棒を兼ねるマイラさん。彼女たちは王都に新しい薬師工房を立ち上げるべく、薬師を探していたのだ。

新たな工房での日々を送る中、わたしはひょんなことからスフィアという元奴隷の少女を弟子として迎え、彼女を指導していくうちに貴族のノーハット家とも繋がりを持つことになった。

「ご令嬢のオリヴィア様やご令息のイアン様の病気を治療したことをきっかけに、『エリン工房』は新進気鋭の薬師工房として国王陛下の耳に入るほど有名な。」

ついには『ハーランド工房』に代わって王宮の常備薬を任されることになる。

そして、アメス祭りで発生した食中毒事件を解決したことで、『エリン工房』は、ミランダ王国では実に数十年ぶりの国家公認工房となったのだ。

国家公認工房の認定式が終わって、一月半が経過した。

毎日の仕事に忙殺されているうちに季節は巡り、気がつけばずいぶん暑くなっていた。

「たっだいまー！ あーつーいー！」

今日も今日とて調合室に籠もっていると、お店側の扉が勢いよく開いて、マイラさんの元気な声が飛んできた。

「マイラさん、おかえりなさい」

わたしはカーテンの隙間から顔を出し、マイラさんを出迎える。彼女は全身汗だくだった。

「お、お疲れ様です。これ、どうぞ」

「エリンさん、ありがとー！」

おらずとタオルを手渡すと、気持ちよさそうに汗を拭っていく。

赤髪からも汗がしたたっていて、本当に暑そうだ。

「すっかり夏ですねえ。はい、トマトをどうぞ。井戸水で冷やしておきましたよ」

その声を聞きつけたのか、クロエさんがトマトの入った小さなカゴを持ってやってきた。

「クロエさん、ありがとー。はむっ」

マイラさんはトマトを受け取ると、勢いよくかじりつく。しゃくつ、という音がした。

「エリンさんも、一つどうぞ」

「あっ、ありがとございます」

続いてわたしに向けて差し出されたトマトを、両手でしっかりと受け取る。

一口かじると、ほどよい甘酸っぱさが口の中いっぱい広がる。

よく冷えていて、体が内側からクールダウンしていくのがわかる。

「エリンさんってば、そんな恰好で暑くないのー？」

冷たいトマトを堪能していると、椅子に座ったマイラさんが、ぱたぱたと手で胸元に風を送りながら聞いてきた。

「そうですね。もっと涼しげな服で作業したほうが、お仕事もはかどりそうですけど」

そう言うクロエさんは、青色の髪が映える純白のワンピースを身にまとっている。

袖は短く、水仕事の邪魔にならない工夫がされていた。

「そ、そう言われましても。これはわたしの仕事着のようなものでして」

対するわたしは、いつもと変わらない長袖の割烹着姿だ。

「調合室って窓もないよね？ 絶対暑いと思うんだけど。エリンさん、髪も長いしさ」

わたしの全身を見ながら、マイラさんが苦笑する。

確かに暑いんだけど……わたしはその、薄着が苦手なのだ。たとえ同性でも、肌を見せるのは恥ずかしい。

「ただいま戻りましたー!」

再び扉が開く音がして、賑やかな声が聞こえた。

ややあって、金髪のツイントールを揺らしながら、一人の少女が工房に飛び込んでくる。わたしの一番弟子であり、この工房の元氣印、スフィアだ。

クロエさんがあつらえた薄手のワンピースが、よく似合っている。

「ふう。この暑さはこたえるな」

そんなスフィアに続き、ミラベルさんが疲れ切った表情で現れた。

「お疲れ様です。買い物、無事に終わりましたか?」

二人にもトマトを差し出しながら、クロエさんが問う。

「なんとか。この調子だと、昼からはもつと暑くなりそうだ。午前中に買い出しが済んでよかったよ」

ため息をつき、ミラベルさんは肩に担いでいた荷物を床に置く。どさりと重い音がした。

「ミラベルさん、手伝っていただいて、ありがとうございます!」

スフィアが笑顔でお礼を言う。その顔はすっかり日焼けしていた。

「氣にするな。ただ……さすがに疲れた。午後は私以外の人間を誘ってくれ」

自身の長い金髪を暑そうに片方の肩に寄せ、ミラベルさんがトマトをかじる。

「そうですね……すみませんが、どなたかお願いできませんか?」

ミラベルさんの言葉に頷いて、スフィアはわたしたちを見渡す。

……はて。スフィア、お昼から何か用事があるのかな。何も聞いてないんだけど。

「あたしはちよつと無理かなー。ほら、お店番もあるし」

「私もちよつと……お洗濯やお掃除、書類整理もしないとですし」

わたしが疑問に思っていると、マイラさんとクロエさんはあからさまに視線をそらす。

この二人、何やら知っている様子だ。

「エリン先生、一緒についてきてもらえませんか?」

スフィアが祈るような表情でわたしを見てくる。

「いいですけど……スフィア、お昼からどこかへ行くんですか?」

「イアン様のところですよ! お呼ばれていましたー!」

尋ねてみると、スフィアはその赤い瞳を輝かせた。

彼女は縁あって、ノーハット家のイアン様と仲良くなった。

丘の上に位置する貴族街にある伯爵様のお屋敷は、絢爛豪華。

平民のわたしは中に入るだけで緊張してしまうし、マイラさんたちが敬遠するのも納得だった。

「あー、その……わたしも調査の仕事が残っていたような。残念ですが……」

スフィアの言葉を聞いたわたしは、目を泳がせる。

彼女には悪いけど、できれば同行したくない。イアン様とは何度も会っているのだけど、人見知

りのわたしは人と会う用事のたびに例外なく緊張してしまう。相手が貴族様となれば尚更だ。「注文票にある薬、全部完成しているみたいですよ！ さっすがエリンさんですね！」

そんなことを考えていると、いつの間にか調合室に足を踏み入れていたクロエさんが、薬の入った袋と注文票を見比べて満面の笑みを浮かべた。

「いやいや、クロエさん、ここで逃げ道を潰さないで……！」

内心そう思うも、口には出せず。わたしはうなだれるしかなかった。

「よかったです！ オリヴィア様もまたエリン先生に会えるのを楽しみにしてましたよ！」

「そ、そうですか。わたしも楽しみです……」

こうなると、わたしに断る勇氣はない。

心底嬉しそうなスフィアに相槌を打つのが精一杯だった。

昼食を済ませたわたしは、よそ行きの服に着替え、スフィアとともに貴族街へ向かった。

さすがに割烹着姿で貴族様に会いに行くわけにはいかなないので、できる限りのおしゃれをしたのだけど……夏用の服なんて持っていないので、クロエさんの服を借りた。

見た目も涼しげな、水色のワンピース。両袖と胸元についたリボンがアクセントなのだと、試着の際にクロエさんが嬉しそうに話してくれた。

けれど、わたしには似合っていないと思う。胸回りも少しきつい気がして、息苦しいし。

「エリン先生とイアン様たちのところに行くの、ずいぶん久しぶりな気がします！」

「そ、そうですね。以前、イアン様が熱を出した時以来なので、二月ほど前ですね」

跳ねるようにわたしの前を歩くスフィアの手には、焼き菓子の入ったバスケットが握られている。久々の訪問ということで、クロエさんが持たせてくれたものだ。

普段、スフィアが遊びに行く時は特に手土産は持たせないけど、今回はわたしが一緒だ。

市販されているお菓子だから、貴族様のお口に合うかはわからないけど……弟子がお世話になっているのだし、せめて感謝の気持ちだけでも伝えないといけない。

そうこうしているうちに坂を上りきり、貴族街へ到着した。

「暑い……」

思わずそんな言葉が口をついて出る。

せっかくおめかししてきたけれど、ここまで来る道中ですでに汗だくだ。

ギラギラと輝く太陽に照らされた貴族街は、人っ子一人歩いていない。

時折馬車が通り過ぎるから、きつと貴族の皆さんはあれで移動しているのだろう。

道の向こうに見える陽炎を憎々しく眺めつつ、わたしたちは歩みを進めた。

しばらくして、ノーハット家の立派な門が見えてくる。

わたしは前に進み出て、緊張しながら門番さんに声をかける。

「こ、こんにちは。エリン・ハーランドと申します……」

一瞬怪訝そうな顔をした彼だったが、直後にスフィアがわたしの後ろから顔を出すと、表情を緩めた。

「ああ……スフィアちゃんのお連れさんだったか。どうぞ」

……門番さんともすっかり打ち解けているなんて、スフィアのコミユ力恐るべし。門をくぐるとすぐにノーハット家の執事^{しじ}であるエドヴィンさんがやってきて、お屋敷の中へ案内してくれた。

「本日はエリン様も一緒だったんですね。これだけの暑さですし、事前にご連絡いただければ、馬車でお迎えに上がりましたのに」

「い、いえ、さすがにそこまでしていただくわけにはいきませんので……」

渡されたタオルで汗を拭^ふきつつ、彼のあとに続く。

このタオル一つとっても、工房で使っているものとは肌触りや吸汗性^{きゅうかんせい}がまったく違う。貴族様が使うものだし、高級なタオルなんだろうなあ。

やがて案内された中庭には、庇^{ひさし}がついた真っ白い東屋^{あずまや}があった。

中には四人がけの立派なテーブルセットが置かれていて、そこにオリヴィア様とイアン様の姉弟が座っている。

「スフィア、いらっしやい」

「イアン様、こんにちは！ お加減はいかがですか？」

二人の前に歩み寄ったスフィアは、ワンピースの裾^{すそ}を持ち上げて挨拶をしたあと、いの一番にそう尋ねた。

きちんと薬師としての自覚があるようで、わたしは安心する。

「お二人とも、お久しぶりでございます」

そんなスフィアに続いて挨拶をし、わたしもイアン様の顔色を確認する。

会うのは久しぶりだけど……見た感じ、体調は良さそうだ。

かつてはその銀髪と同じくらい白く見えた肌も、今日は血色がいい。翡翠色^{ひすい}の瞳も力強く、確実に体力が戻ってきている気がした。

「今日はエリン様も来てくださったんですね。ご無沙汰^{ぶさた}しています」

オリヴィア様が立ち上がり、わたしの手を取る。

彼女の白銀色のウェーブヘアがわずかに揺れ、香水のいい香り^{かお}がした。

「オ、オリヴィア様、お久しぶりでございますっ……！」

思わぬ行動に、わたしは小さく飛び跳ねてしまう。

気さくに接してくださるわけだし、喜ぶべきなのだろうけど……人見知りのわたしには、心臓に悪い。

「外は暑かったのですか？ 手にまで汗をかいていますよ？」

両肩の出た薄緑色のサマードレスをまとったオリヴィア様は、鳶色^{とびいろ}の瞳を細める。

て、手汗は緊張のせいです……！

「オリヴィア様、これ、お土産のクッキーです！」

わたしが答えに困っていると、スフィアがバスケットを掲^かげるように持ち上げた。

「し、市販品ですので、お口に合うかはわかりませんが」

恐縮しながら付け加えるも、オリヴィア様は笑顔でクッキーを受け取ってくれる。

「わざわざありがとうございます。それなら、お茶を用意しないといけませんね」

「はい。ご用意しております」

オリヴィア様がそう言った直後、ティーセットを手にしたエドヴィンさんが、どこからともなく現れた。

まるで彼女の発言を予知していたかのような早業に、わたしとスフィアは目を丸くした。

その後、エドヴィンさんが淹れてくれたお茶をいただきながら、オリヴィア様たちとお話をする。春バラを使った冷たいお茶は甘酸っぱく、とても飲みやすかった。

「お茶、おいしいです。ありがとうございます」

「ふふ、クッキーもおいしいですよ」

たまたましくお礼を述べると、オリヴィア様は笑みを浮かべ、優雅にクッキーを口に運んだ。

……相変わらず、すごく絵になる人だ。

「それにしても……エリン様がいらつしやるとわかっていたら、お父様も出立を先延ばしにされたでしょうに」

「そうだね。父様、エリンさんを相当気に入ってるようだし」

姉に続いて、イアン様は朗らかな表情でクッキーを口にする。わたしよりも年下だというのに、その所作には無駄がない。

しかし、ノーハット伯爵様がわたしを気に入ってくれている理由がわからない。

いくらご子息たちの病気を治した実績があるとはいえ、わたしはただの薬師だというのに。
「伯爵様、お出かけになられてるんですか？」

まるで小動物のようにさくさくとクッキーを頬張っていたスフィアが、二人に尋ねる。

オリヴィア様はイアン様やエドヴィンさんに目配せしたあと、静かに口を開く。

「ええ、海辺の街ポルティアに。わたくしたちも、近いうちにそちらへ行く予定です」

「え、引越なさるんですか？」

予想外の言葉に、わたしとスフィアの声が重なった。

ポルティアといえば、ここから馬車で二日はかかる距離だ。

そうなると、スフィアもおいそれと会いに行けなくなってしまう。

「ああ……定住するわけではないのです。夏の間だけです。あの街には別荘があるので」

わたしたちがショックを受けているのを見て、オリヴィア様は慌てて訂正した。

「そ、そうだったんですね……もう、会えなくなるのかと思ってしまいました」

涙目になっていたスフィアは、へなへなとテーブルに突っ伏した。

わたしたちが住むミランダ王国の夏は短いけれど、すごく暑くなる。

だから、貴族様は避暑地に別荘を買い、夏の盛りはそちらに移り住む……なんて話を聞いたことがある。実際にそうする人を目の当たりにするのは初めてだけど。

「そこで、ものは相談なのですが……エリン様たちも、わたくしたちと一緒に来ませんか？」

「はい!？」

オリヴィア様からの提案を受け、わたしは素っ頓狂な声を上げてしまう。
い、いくら仲良くさせてもらっているとはいえ、それはダメなのでは？
そもそも、身分が違うわけだし……！

「はい！ ぜひ行ってみたいです！」

わたしがパニックになる中、スフィアは満面の笑みを浮かべて即答した。

「ちょ、ちよつとスフィア、待ってください。さすがに即決はまずいですよ。その、伯爵様がお許しになるはずがありません」

「いえ、お父様にはもう相談してあるのです。むしろ、わたくしの提案を喜んでおりましたよ。」

『エリン工房』の皆さん、全員を招待して構わないとも言ってくれました」

「えええ……」

スフィアの両肩を掴みながら諭すわたしに、オリヴィア様はあっけらかんと告げる。

「そ、そういうことなら、スフィアだけお願いできますか。全員でお世話になるというのは、さすがにご負担でしょうし」

「エリン先生、一緒に来てくれないんですか？」

わたしがそう続けると、スフィアは一転、泣きそうな顔になった。

「いやその、えっと」

スフィアの表情を見てしまい、言葉に詰まる。

わたしは性格上、誰かと一緒にいるだけで気疲れしてしまう。

貴族様と一緒に生活するなんて、考えただけで精神が保たない。

それにわたしは、あの工房を、住み慣れた場所を離れるのが怖いのだ。

「エリン先生、せっかく誘ってくれているんですし、一緒に行きましょうよ」

そんなわたしの葛藤など露知らず、スフィアは何度も頭を下げて懇願してくる。

「うーん、うーん……」

「実は、エリン様に耳寄りな情報があります」

わたしが思い悩んでいると、エドヴィンさんが口を開いた。

「海辺の街ポルティアの砂浜では、良質なミレー貝が採れるそうですよ」

「……ミレー貝ですと？」

まさかの名前に、わたしは目を見開いてしまう。

スフィアが首をかしげた。

「ミレー貝……確か薬師の教本に載ってましたが、そんなに珍しいものなんですか？」

「珍しいも何も……ミレー貝は殻を粉末状にすると薬材となる、貴重な貝なんです。薬材の多くが植物由来の中、数少ない動物性のもので、乾燥させずとも長期保存ができ、毛穴や血管を引き締める効果があることから、精神不安や不眠、胃腸の薬として重宝されていて——」

「すごいね。やっぱりエリンさん、スフィアの師匠なんだ」

「——はっ。す、すみません」

つい熱弁を振るっていると、イアン様が驚いた表情を見せた。わたしは我に返る。

「ミレー貝は、海がないこの街では採取が難しい薬材です。我々にご同行くだされば、いくらでも集める機会があると思いますが」

「あー、うー……」

笑いを堪えているエドヴィンさんに対し、わたしは呻いた。

確かにミレー貝は非常に珍しい薬材だし、魅力的なお誘いではあるけど……！

「こ、このたびのご提案は、一度工房に持ち帰って検討させていただきます……！」
その場の視線を一身に集めつつ、そう返すのが精一杯だった。

……『エリン工房』に戻ったわたしたちは、早速オリヴィア様からのお誘いの件をみんなに話して聞かせた。

「ポルティヤに行けるの!？」

「それに貴族様の別荘なんて、そうそうお邪魔できるものじゃないですよ」

予想どおり、マイラさんとクロエさんは瞳を輝かせている。

「ポルティヤといえば、綺麗な海水浴場があることで有名な場所ですよ」

「そうだよ。貴族様の別荘に滞在して海水浴なんて、絶対体験できないよ!」

「それはわかっていますが……お二人とも、ちよつと落ち着いてください……!」

クロエさんとマイラさんに左右から言われ、わたしはしどろもどろだ。

「別荘に滞在させてもらえるのはありがたいが、夏の間『エリン工房』を閉めっぱなしにするわけ

にもいかないだろ。誰かがここに残るべきだ」

どこか浮かれた空気を断ち切るように、ミラベルさんが口を挟む。

「あ……それもそうだねえ……」

それによって、マイラさんたちの勢いは一気にしぼんでしまった。

『エリン工房』はこの街にとって、なくてはならない存在だ。国家公認工房が長期休業なんてことになったら、いろいろと問題だと思う。

……そうだ。ここで、「わたしが残りたい」と切り出せば、みんなも納得してくれるはず。

スフィアには悪いけど、『エリン工房』の看板薬師はわたしだし。留守番の理由としては十分だ。そうと決まれば、それをみんなに伝えるだけ。頑張れエリン。負けるなエリン。

「というわけで、工房には私が残ろう」

「え」

いざ話を切り出そうとした矢先、ミラベルさんがそう言い放った。

「で、でもでも、その場合、薬はどうするんですか?」

「もちろん、エリンに用意してもらう」

必死に問いかけると、ミラベルさんは長い金髪をいじりながら、当然のように言った。

「ポルティヤに出発するまでまだ時間があるのだろう? 王宮に納める薬や店頭用の常備薬、緊急用の薬一式など、必要と思われるものはすべて用意してくれ。店番だけなら、私一人で十分だ」

「は、はあ……でも、その……」

「ということ、先生と一緒にイアン様たちの別荘に行けるんですね！」
「むぎゅ!」

なんとか残る理由をひねり出そうとしていると、嬉しさを爆発させたスフィアが抱きついてきた。
わたしは彼女と一緒に床に倒れ込む。

「まあ、ここからポルティアまでは馬車で二日ほどの距離だ。いざとなれば呼び戻さす」
スフィアに押し潰されかけているわたしを見下ろし、ミラベルさんは含み笑いうる。

見事に先手を取られてしまった。こうなると、断るのはもう無理だ。

「ミラベルさんには悪いけど、今年の夏は貴族様の別荘で海水浴! これに決まりだね!」

「ああ、私はもう人前で泳ぐような歳でもないし、お前たちだけで楽しんでくるといい」

「はい! エリンさん、せっかく海に行くんですし、水着を用意しないといけませんね!」

すっかり勢いを取り戻したクロエさんとマイラさんが、嬉々として言い出す。

「え、水着!」

なにやら不穏な単語が聞こえてきて、わたしは慌てて立ち上がった。

「そうだよ! エリンさんスタイルいいし、きつと似合うよ!」

「い、いえ、そんなことはないですよ……」

「自分を卑下しな! 思い立ったがなんとやら! 今から水着を買いに行こう!」

「そうですね! スフィアちゃんも一緒に行きましょう! ミラベルさん、お店番お願いします!」

そう言うが早い、マイラさんとクロエさんはわたしとスフィアの手を取って走り出す。

「あの、もう夕方ですけど……あああ……!」

その圧倒的な行動力の前には、為す術なく。

商店街へ向けて、わたしはすると引きずられていったのだった。



それからほとんど拍子に話が進み、ついに出発の日を迎えてしまった。

「ノーハット伯爵様、このたびはお心遣い、痛み入ります」

「そうかしこまらないでくれ。私が好きでやったことだ」

早朝のうちからミラベルさんを含めた全員でノーハット家に向かい、伯爵様にご挨拶する。
ポルティアに滞在していらしたはずだけど、わざわざ迎えに来てくれたのかな。

「こちらとしても、工房を手薄にさせてしまつてすまぬな。屋敷に係の者を残しているので、必要とあればなんなりと申し付けてくれ」

「ありがたきお言葉でございます」

深々と頭を下げるミラベルさんに倣って、わたしたちもお辞儀をする。

そうこうしているうちに、二台の馬車がやってきた。

一台はエドヴィンさんが手綱を引く四人乗りの立派な馬車で、もう一台は幌馬車だった。

一月近く滞在するというので、荷物もかなりの量になるようだ。

普通の馬車では到底運べないので、こうして幌馬車も用意したのだろう。

「レリックよ、よろしく頼んだぞ」

「お任せください！」

伯爵様に声をかけられ、幌馬車の上で一礼するのは、肩ほどまでの金髪に羽根つきのハンチング帽を被った男性——商人のレリックさんだった。

彼はうちの工房にも薬材を卸してくれているのだけど、伯爵様とも繋がりがあったんだ。

「それでは出発するでしょう。では、あちらの幌馬車には……」

意外な人物の登場にわたしが驚く中、伯爵様は変わらぬ調子で人員を割り振っていく。

元貿易商ということも関係あるのか、場を仕切るのがお好きなようだ。

……程なくして、わたしたちを乗せた馬車がノーハット家の門前を出発した。

所狭しと荷物が積まれた幌馬車に、スフィアとクロエさん、マイラさんが乗り込んでいる。

一方、エドヴィンさんが操縦する四人乗りの豪華な馬車には、伯爵様をはじめとしたノーハット家の皆様と、なぜかわたしが乗せられていた。

……ど、どうしてこんなことに？

まさかの伯爵様ご一家との相席に、出発直後にもかかわらずわたしの緊張はピークに達していた。揺れる馬車に身を任せているだけだというのに、三人がまとうオーラがわたしと違いすぎる。まさに上流階級。胃が痛い。

「さて、薬師殿、そなたとは少しばかり話をしたい」

「は、はひ……」

胃腸薬、調合しておけばよかった……なんて考えていると、伯爵様が膝の上で両手を組みながらそう口にした。わたしは姿勢を直す。

「そう硬くならないで。お父様、エリン様とお話したいがために戻ってこられたんです」

「そ、そうだったんですか。それは、ご足労をおかけしまして……」

緊張をほぐすようにオリヴィア様が言うも、わたしは視線をさまよわせるばかりだ。

わたしのために、伯爵様がわざわざ？　ますます意味がわからない。

「唐突な質問になるが、薬師殿のお父上の名はネストではないか？」

「えっ……」

続いて伯爵様の口から出た名前に、わたしは言葉に詰まる。

それは久しぶりに聞いた、父の名だった。

「そ、そうです。ネスト・ハーランドです」

「やはりか。薬師殿の家名を聞いた時、そうではないかと思っていたのだ」

「は、伯爵様は、父をご存知なんですか？」

「知っているも何も、彼とは親友だった。また、よき仕事仲間でもあった」

伯爵様はどこか嬉しそうな表情を見せる。

若い頃から薬師として働いていた父は、商家であるマルト家に出入りしていたという。

元貿易商だというノーハット伯爵様とも、古くから交流があったのかもしれない。

「しかしそうか。あなたがあのネストの一人娘だったとは。国一番の薬師とまで呼ばれた彼の血をしつかりと受け継いでいるようだな」

「も、もしかして、気づいておられたんですか」

「ハーランドという家名は珍しいが、正直確証はなかった。娘が生まれたという話は聞いていたものの、私は一度も会ったことがないからな」

伯爵様が優しい眼差しを向けてくる。

そこまで話を聞いて、わたしは腑に落ちる。

いくらオリヴィア様やイアン様の病気を治したとはいえ、『エリン工房』の設備の修繕を申し出てくれたり、屋敷への出入りを許可してくれたり、今回は別荘へ招待してくれたり、伯爵様のご厚意は度を越している。

……わたしは伯爵様にとって、かつての親友の娘。

彼が目をかけてくれる理由は、そこにあつたのだ。

「せっかくの機会だ。私とネストがともに旅をした時の話をしようじゃないか」

そんなことを考えていると、伯爵様はどこか嬉しそうに言い出した。

「ふふふ。エリン様、お父様のお話は一度始まると長いですよ」

「あつ、いえ、長いお話、望むところで……！」

緊張して頭が回らず、妙なことを口走ってしまう。馬車の中が笑い声に包まれた。

「薬師殿……いや、エリン殿は実に愉快だな」

伯爵様がわざわざ名前前で呼んでくれたことに驚くも、恥ずかしさが勝ってしまった。わたしは思わず顔を伏せる。

「父様、エリンさんが困ってるよ」

「はは、すまん。冗談はこのくらいにして、始めるか」

呆れ顔のイアン様に謝ったあと、伯爵様は咳払いを一つして、父との思い出話を始めた。それはわたしが生まれる前の、わたしの知らない父の物語だった。

若かりし頃の父は、まだ爵位を得る前の伯爵様の船に船医として乗り込み、貿易航路の開拓を手伝っていたそうだ。

父は船内で発生した疫病を沈静化させただけでなく、時には伯爵様とともに、貿易船を狙う海賊を相手に大立ち回りをすることもあったらしい。

「ネストは剣術の腕も一流だったからな。何度助けられたかわからん」

そう話を締めくくった伯爵様は、終始楽しそうだった。

「実に興味深いお話でしたわ」

「本当だね。下手な本より面白かったかも」

オリヴィア様やイアン様も初めて聞く内容だったようで、まるで英雄の冒険譚を聞き終えたあとのような晴れやかな表情をしていた。

一方のわたしは、時折相槌を打っていたものの、ハラハラしっぱなしだった。

……海賊を相手に大立ち回り？ 若い頃のお父さん、何やってるの！

思いつき叫びたい気分だったけど、馬車の中で叫ぶわけにもいかない。その代わり、ほんの少しだけ緊張がほぐれたような、そんな気がした。

半日ほど馬車を走らせ、川の近くにきたところで一旦休憩となる。

「日が暮れるまでまた馬車に揺られるのだ。各自、十分な食事と休息を取ってくれ」

長距離移動が商隊を率いていた頃を思い出させるのか、伯爵様は率先して指示を出している。

そこに貴族としてのオーラはなく、他のみんなもどこか開放的な雰囲気包まれているようだ。

執事のエドヴィンさんが用意してくれた食事を堪能したあと、わたしはみんなから少し離れた木陰に移動する。

そこで愛用の薬研を取り出し、薬材の粉碎作業を始めた。

せっかくの旅だし、みんなのために食後の薬茶を作ろうと思ったのだ。

まずはジャールの根とスイートリーフ、パープルアイを用意して粉にする。

それと並行して、土瓶にお湯を沸かして茶葉を抽出。

ある程度色が出たら中身をポットに移し、今度は土瓶で薬材を煮出していく。

最後にその二つを混ぜてハチミツを加えれば、疲労回復効果と血行促進効果を併せ持った、甘い薬茶が完成するのだけ……。

「……やはり、貴殿はリーベルグ商会のご令嬢であつたか」

「令嬢など、そんな大それたものではございません」

土瓶での煮出し作業を進めていると、少し離れたところから伯爵様とクロエさんの声が聞こえた。

「お父上はお元氣か？」

「はい。おかげさまで。今は南方で商隊を率いています」

「はっはっは、相変わらず自ら動いているのだな。いい歳だろうに」

「本当です。娘の氣も知らないで」

木の陰に隠れるようにして覗き見ると、クロエさんは優雅な所作で伯爵様と話をしていた。

普段はそんな素振りを見せないけど、クロエさんってやっぱりお嬢様なんだなあ……。

そんなことを考えていたら、火にかけていた土瓶が盛大に噴きこぼれた。

「わわわっ」

外だから、火の調整がうまくいかなかったのかな……なんて思いつつ、土瓶に手を伸ばす。

「熱っ！」

直後に噴き出した蒸気に手が触れ、驚いた拍子に土瓶をひっくり返してしまう。

がしんと大きな音が出て、クロエさんたちの会話が止まった。

「……これは何事だ？」

「わ、エリンさん、こんなところで何をしてるんですか？」

姿を見せたクロエさんと伯爵様は、中身をぶちまけて地面に転がる土瓶と、その隣で顔面蒼白のわたしを交互に見て、驚きの声を上げた。

「い、いえその、食後の薬茶を作ろうとしたんですが……ご覧のとおり、失敗してしまいました」

「はっはっは。国家公認工房の看板薬師でも失敗することがあるのか」

「す、すみません。余計なことをしようとしたばかりに、貴重な薬材を無駄に……」

「気にするでない。それより、手の火傷は大丈夫か？」

萎縮するわたしを伯爵様が気遣う。

「あっ、はい。濡らした布で冷やしておけば、すぐによくなります。いざとなれば、塗り薬も作れますので」

「ほう、エリン殿の薬には、塗り薬もあるのか」

「な、軟膏の一種になります。紫紺草と月の花を使った炎症止めで、皮膚の病気のほか、火傷や虫刺され、切り傷にも効果があります」

「虫刺されか……そういえば、これから向かうポルティアは自然豊かなせいか、虫も多かったな。その薬、ゆくゆくは調査してもらおうか」

「はい。かしこまりました」

わたしはそう答えつつ、頭の中で塗り薬のレシピをまとめ出す。

「ほらほら、薬もいいですけど、まずは火傷の手当てをしますよ！」

笑顔のクロエさんはぴしやりと言って、思考が飛びかけたわたしを近くの小川へ引っ張っていく。

「そうだ。エリン殿」

「あ、はい。なんでしょうか」

伯爵様に呼び止められ、わたしは足を止める。

「まだまだ時間はある。その薬茶とやらも、楽しみにしているぞ」

振り返ると、伯爵様は笑顔でそう言ってくれたのだった。



それから二日後。わたしたちを乗せた馬車は海辺の街ポルティアに到着した。

大陸の南端に位置する細い半島に沿って築かれたこの街は、そのほとんどが海に面していて、強い潮の香りがした。

門をくぐった馬車が、人の多い通りをゆつくりと進む。

「綺麗な街ですねー。お土産屋さんたくさん並んでいます！」

周囲の砂浜と海に合わせてか、白壁と青い屋根に統一された無数の建物を見ながら、スフィアが感嘆の声を上げている。

ちなみにわたしは、初日の夜以降、スフィアやマイラさんと同じ幌馬車に移っていた。

ずっと貴族様と一緒になんて、わたしの精神が耐えられなかったのだ。

「あ、あれって薬師工房ですかね？ この街にもあるんですね！」

身を乗り出すように街並みを見ていたスフィアが、どこか嬉しそうに叫ぶ。

釣られて外を見ると、『フランティオ工房』と書かれた看板が目に入った。

陳列窓に並んでいる商品を見る限り、薬師工房で間違いなさそうだ。

「やっぱり薬師さんたちは、どこに行っても薬のことが気になるのですか？」

「あつ、いえ、そういうわけでは……」

手綱を引くレリックさんに突然話しかけられ、わたしはしどろもどろになる。

気さくな人だけど、やっぱり男の人だし。話す時はいまだに緊張してしまうのだ。

「あ、そろそろ別荘が見えてきましたよ」

レリックさんが前方を指し示す。

街全体が見渡せそうな丘の上に、大きなお屋敷が建っていた。

三階建てらしい別荘は、ミランダ王国の貴族街にあるノーハット家の屋敷より大きい気がする。

街との調和を考えているのか、他の建物と同じように白い壁と青い屋根で作られていた。

これからしばらくの間、あのお屋敷で暮らすのか……考えただけで、胃が縮む思いがした。

……頑張れエリン。負けるなエリン。

辿り着いた別荘には、何人ものメイドが待機していて、わたしたちを出迎えてくれた。

「エドヴィンよ、子どもたちと客人たちを頼んだぞ」

「お任せくださいませ」

メイドたちに交ざって荷物の搬入^{はんにゅう}を手伝っていると、伯爵様は用事があるのか、どこかへ出かけていった。

「滞在期間中、皆様はこちらの部屋をお使いください」

やがてエドヴィンさんに案内されたのは、四人用とは思えない広々とした客室だった。

王都のお屋敷にも負けぬ豪華さに、わたしたちは言葉を失ってしまう。

「こういう柔らかなベッドを見ると、ぼふーん、って飛び込みたくなるけど……さすがにはしたないかな？」

「それが許されるのはスフィアちゃんぐらいの歳までです。マイラはやめてくださいね」

今にもダイブしそうな勢いのマイラさんを、クロエさんが笑顔で制止している。

それを横目に見つつ、わたしはあてがわれたベッドの脇^{わき}に自分の荷物を置く。

「エリン様には、個別にご案内しておきたい場所がございます。こちらへどうぞ」

「あ、はい」

先導してくれるエドヴィンさんについて部屋を出ると、建物の地下にある調査室に案内された。

薬材倉庫も兼ねているのか、大きな薬棚もある。

「エリン様、滞在中に薬の調合をなさる時は、ここの薬材と設備をお使いください」

「あ、ありがとうございます。おお……これも立派な作りで」

お礼を言ったあと、整然と並んだ薬棚に思わず見惚^{みと}れてしまう。

「ご満足いただけたようで何よりです。それでは、わたくしは表におりますので」

そんなわたしを嬉しそうに見て、エドヴィンさんは調査室を出ていった。

残されたわたしは高ぶる気持ちを抑^{おさ}えつつ、棚の中を拝見させてもらう。

「こ、これはモグラダケ。こっちはアカネの棘^{とげ}が……」

一般的な薬材がひととおり揃っていただけでなく、王都では見ないような珍しいものもあった。

興奮のあまり、わたしは踊り出したくなる。

「エリンさん、何してるの？」

「……はっ」

そうして踊りかけたところを、やってきたマイラさんにすっかり見られてしまった。わたしはしばし硬直し、空いていた柵の一つに無言のまま頭を突っ込んだ。

「ちよっとエリンさん！ 恥ずかしいからって、そんなところに隠れないでよー！ 誰にも言わないからー！」

「マイラさんに見られた時点で手遅れなんですが……引つ張り出さないでください……」
必死に抵抗するも、拳闘士の彼女に力で敵うはずもなく。

わたしは引き出しごと、ずるずると引つ張り出される。

「オリヴィア様がみんなで浜辺に行こうって！ もちろん、エリンさんも来るよね！」

「い、いえ、わたしはここで薬材と戯れていようかと……」

「決まり！ それじゃ、早速準備しないとね！」

「あああああ」

丁重に断つたものの、マイラさんは聞く耳を持っていなかった。

そのままわたしの腕を掴むと、ものすごい力で外へ引つ張っていくのだった。

……というわけで、わたしは半強制的に浜辺へ連れてこられていた。

ここはノーハット家のプライベートビーチで、わたしたち以外の人影はない。

さんさんと照りつける太陽と、日差しを跳ね返して輝く海、そして真っ白な浜辺。そのすべてが眩しい。

「すっごーい！ どこまでも青いー！」

「海の水は塩辛いと本に書いてありましたが、本当なんですわね！」

「スフィアちゃん、波に近づきすぎると、足をすくわれますよ？」

そんな絶景の真ん中で、水着姿のマイラさんとスフィア、クロエさんの三人がはしゃいでいる。くはっ……真夏の太陽以上に、みんなの姿が眩しい。眩しすぎる……！

波打ち際で遊ぶ三人を直視できず、わたしは近くに立てられたパラソルの一つに避難した。
……ふう。やっぱり日陰は落ち着く。

「遠慮なさらずに、エリン様も皆さんと一緒に楽しまれてください」

思わず安堵の息を漏らしていると、隣からオリヴィア様の声がした。

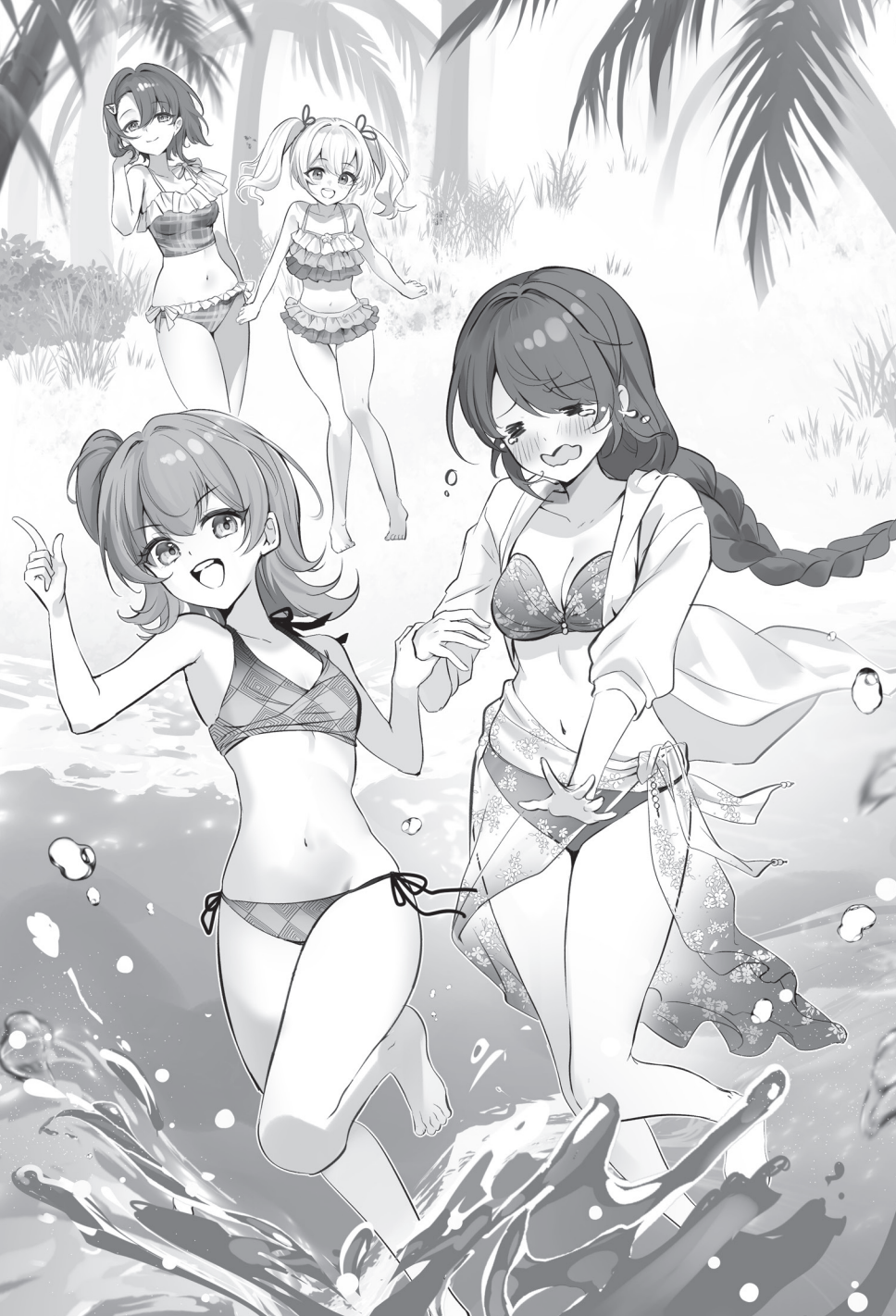
彼女は白いワンピースを身にまとい、イアン様と同じパラソルの下にいた。安易に水着を着ないあたりが、貴族らしさを醸し出している気がする。

「い、いえ、別に遠慮しているわけでは……」

「エリンさん、そんなところで何してるのー？」

「先生も一緒に遊びましょうよー！」

そんな言葉を口にした時、マイラさんとスフィアがこちらにやってきた。



「てゆーかエリンさん、なんで割烹着のままなの？ 水着、持ってきてたよね？」

「も、持ってきてはいますが、わたしの目的はあくまでミレー貝の採取なので……」

「つべこべ言っていないで着替える！ その服、見るからに暑苦しいし、脱がしちゃうぞ！」

「ひー！ イアン様にエドヴィンさんもいるんですから、やめてくださいー！ 自分で着替えま
すー！」

本気で服を脱がしに来るマイラさんに身の危険を感じたわたしは、泣く泣く水着に着替えること
にしたのだった。

うう……半袖ですら抵抗があるのに、水着だなんて……恥ずか死にそう。

……そうして水着に着替えさせられたわたしは、みんなと一緒に浜辺で遊ぶことになった。

「エリンさん、一緒に泳ごうよ！」

「あぶぶぶぶ……」

マイラさんに海に引つ張り込まれるも、叔父一家によって長い間家に閉じ込められていたわたし
は、海に行ったことなんてない。当然のように泳げなかった。

「そ、そうだ！ 四人いますし、砂浜でボールを使った遊びをしましょう！」

マイラさんに抱えられて浜辺に戻ったわたしを、クロエさんがフォローしてくれた。

ボール遊びも海では定番の遊びらしい。けれど、普段まったく運動しないわたしは、スフィアに
すら太刀打ちできず。

投げつけられたボールが顔面を直撃し、砂の上に仰向けにひっくり返る。すごく恥ずかしい。

プライベートビーチで、自分たち以外に人がいないのがせめてもの救いだった。

「ふへえ……」

それからいろいろな遊びをし、わたしは疲労困憊でパラソルの下に戻ってきた。

「皆さん、変わった遊びをたくさんご存知なんですね」

砂の上に横たわるわたしの傍らで、オリヴィア様は上品な笑みを浮かべる。

平民にとつては定番の遊びも、貴族様の目には新鮮に映るのかもしれない。

「その、オリヴィア様たちは普段、海でどんなことをされているんですか」

少し気になったので、遠慮がちに尋ねてみた。

「そうですね……波の音を聞きながら読書をしたり、フルーツジュースを飲んだりしています。夜に星を見に来ることもありますね」

優雅だ……。

なんというか、海での過ごし方一つとっても、わたしたちとは違う。

「でも、みんなと一緒に遊びたいって気持ちも少しあるかな」

するとイアン様が本を片手に、どこか寂しそうにスフィアたちを見た。

以前に比べて体力がついてきたとはいえ、彼は生まれつき体が弱い。本人も体を動かすことを躊躇しているみたいだ。

せっかく海に来ているのだし、一緒に楽しんでほしいところだけど……。

「皆様、少し休憩になさいませんか」

その時、エドヴィンさんが人の頭より大きなフルーツを抱えてやってきた。

見たことのない果物だけど、このあたりの特産品なのかな。

「あ、それってレシヤブの実ですか？」

わたしが目を丸くしていると、パラソルの下へやってきたクロエさんが声を弾ませた。

「クロエ様、ご存知でしたか」

「はい。この縞模様は一度見たら忘れないですよ。真っ赤な果肉は水分をたっぷり含んで甘いんです。種がたくさんあるのが難点ですが、その種も地域によっては薬になるとか」

「ほう、薬」

「そこに反応するの、さすがエリンさんだよねえ」

つい身を乗り出してしまうと、マイラさんが呆れ笑いを見せる。うう、恥ずかしい……。

「でも、本当に大きな果物ですね……そのナイフで切れるんですか？」

自分の顔より大きな果実をまじまじと見つめながら、スフィアが問う。

「はは、多少力が必要ですが、大丈夫ですよ」

それを聞いたエドヴィンさんは笑顔を見せ、実の表皮にナイフを入れた。

ところが、刃がそれ以上進まない。エドヴィンさんは何度か力を入れ直すも、すぐに諦め顔でナイフを引き抜いた。

「別荘の管理をしていた者が、ナイフの手入れを怠っていましたかね。すぐ、切ったものをご用意します」

「あ、待ってください」

レシャプの実を手にしち去ろうとしたエドヴィンさんを、クロエさんが呼び止める。

「旅の商人さんから聞いたのですが……はるか東の島国では、夏になると平民たちの間で様々な儀式が行われるそうです。その中に、レシャプの実を使ったものがあるのだとか」

「はて、儀式ですか？」

「はい。目隠しをし、仲間たちに声で誘導してもらいながら、レシャプの実を棒で叩き割るんです。見事叩き割ることができた者には、幸運が訪れるのだとか」

「……変わった儀式ですな」

エドヴィンさんは手元のレシャプの実をしげしげと見つめる。

「仲間たちと一緒にいうことで一体感や絆を感じられるらしく。儀式としての意味合いより、そちらが重要視されていたようです」

そんなクロエさんの説明を聞いて、わたしはあることを思いつく。

「あ、あの、その儀式、みんなでやってみませんか。できたら、イアン様やオリヴィア様も一緒に」

「え、わたくしたちもですか？」

「そ、そうです。平民の遊びをするのも、社会勉強になるかと……」

わたしがそう続けると、オリヴィア様は戸惑い顔でエドヴィンさんを見る。

「あああ、出しゃばってしまってますみません。忘れてください」

「いえ、せっかくですし、やってみたいですわ」

微妙な反応を見て思わず砂の上で平伏すると、オリヴィア様が笑顔で立ち上がった。

「エドヴィン、せっかくですし、イアンも参加していいでしょう？」

「そうですね……激しく動くわけではなさそうですし、少しくらいでしたら」

「よかったです！ イアン様、一緒にやりましょう！」

エドヴィンさんの返事を聞くや否や、スフィアがイアン様の手を取った。

予想外だったのか、イアン様はたじろいでいる。

クロエさんがあたりを見回す。

「目隠しにはこのタオルを使いましょう。あとは木の棒が必要なんですが……」

「クロエさん、これでいいー？」

マイラさんが少し離れた場所で立派な木の棒を振り回していた。

「十分ですよー。他に必要なものは……」

わたしの提案を皮切りに、ほとんど拍子に準備が進んでいく。

嬉しい気持ちになりつつ、わたしも準備を手伝った。

……やがて用意が整い、レシャプの実を使った儀式が始まる。

一番手はイアン様だ。

「右ですよー」

「あ、もう少し左です！」

イアン様は目隠しをし、クロエさんやスフィアの指示を受けながら前に進んでいく。

オリヴィア様とエドヴィンさんはハラハラした様子で見守っていたけど、ここは一面砂浜だし、こけたとしても怪我はしないだろう。

「あ、イアン様、そこです！」

「せいっ！」

スフィアが叫んだ瞬間、イアン様は持っていた棒を振り下ろす。

その一撃はレシヤプの実を直撃したものの、ボコンという音とともに弾き返されてしまった。

狙いはよかったけど、実を割るには力が足りなかったみたいだ。

「手応えはあったんだけどなあ。うーん、もつと腕力をつけないとダメだね」

目隠しを外して状況を把握したイアン様は、悔しそうな表情でパラソルの下に戻ってきた。

「じゃあ、次は私が頑張ります！」

そんな彼から目隠しと棒を手渡されたスフィアは、意気揚々とスタート地点へ駆けていく。

「今度はスフィアちゃんだね。頑張れ！」

マイラさんの声援を受け、目隠しをしたスフィアが進んでいく。

「……そこです！　うりゃあー！　って、わー！？」

やがて思いっきり棒を振り下ろすも……豪快に砂を叩き、彼女は勢いそのまま地面にひっくり返った。

「わ、スフィアちゃん、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です。実際にやってみると、すごく難しいです。ぺっぺっ」

目隠しを外したあと、スフィアは口に入ってしまった砂を懸命に吐き出していた。

「それでは、わたくしが挑戦してみますわ」

とぼとぼと戻ってきたスフィアから目隠しを受け取ったのは、オリヴィア様だった。

眼光鋭くレシヤプの実を睨みつけながら、彼女は宣言する。

「イアンとスフィアちゃんの仇を取らせてもらいます」

いや、仇って。いろいろと大袈裟すぎるような。

「……いざ、参ります」

そうこうしているうちに、オリヴィア様は目隠しをし、レシヤプの実と対峙した。

棒の握り方が、妙に様になっている。まるで剣でも握っているようだ。

「あ、あの。オリヴィア様って、もしかして武術の心得が……？」

右だ左だと誘導されるのを聞きながら、わたしはエドヴィンさんに小声で尋ねてみた。

「ええ、貴族ですから、当然剣術も嗜んでおられます。演舞会で優勝されたこともございますよ」

「オリヴィア様、そこですよー！」

「はあっ！」

気合の入った掛け声とともに棒が振り下ろされた。

腰の入った、見事な一撃。どごっ、という音がして、レシヤプの実は真っ二つに割れた。

「オリヴィア様、お見事です」

一瞬の静寂のあと、エドヴィンさんの声が静かに響いた。

「スフィアちゃんの声でだいたい気配は察していましたが、うまく当てられてよかったですわ」
目隠しを外し、オリヴィア様は満ち足りた表情を見せる。

……まさか、オリヴィア様に剣術の心得があつたなんて。
予想外の展開に、わたしはただただ驚くばかりだった。

その後、割ったレシヤプの実をみんなで食べる。

ナイフで切り分けた時と違って形は歪いびつだけど、謎の達成感があつた。

「んー、おいしいです！」

「本当ですね。なんだか、いつも食べている果物よりおいしい気がします」

スフィアとオリヴィア様は、そう言って顔を見合わせる。

二人は口のまわりを果汁でべとべとにしていたけど、どちらも幸せそうな顔をしている。

その様子を見てみると、同じく口のまわりを汚したイアン様と目が合った。

直後、彼は年相応の笑顔を見せてくれる。

それを見て、わたしは勇気を出してよかったと、心から思ったのだった。

休憩を終えたみんなが再び遊び始める中、わたしは一人、砂浜でミレー貝を探していた。

「……あれ？」

ようやく本来の目的に着手できる……なんて考えていたのに、いくら探してもそれらしい貝が見

つからない。

ミレー貝は貝殻が薬になるだけでなく、中身もおいしく食べることができる。

場所によつては乱獲らんかくされている可能性もあるけど……ここは伯爵家のプライベートビーチだ。荒あ

らされる可能性は低いと思う。

道具を手に砂浜を探し回るも……やはり貝は見つからない。

「あの……ミレー貝、ぜんぜんいないんですが」

わたしはエドヴィンさんのもとへ向かい、おずおずと質問する。

「おかしいですね……もしかすると、今年は潮の流れが違うのかもしれない」

イアン様の近くに控えるエドヴィンさんは、海を見ながらそう口にした。

「ということは、この街でミレー貝は手に入らないと……？」

「いえ、繁殖地はんしよちが変わっているだけでしょう。ここではなく、街の反対側の浜辺であれば確保できるかと」

肩を落とすわたしに、エドヴィンさんはそんな言葉を返してくれた。

「そ、そうですか……うん？」

一瞬安心するも、彼の言葉が少し引つかかった。

「ま、街の反対側……というと、まさか……」

「ええ。一般の方々に開放されている浜辺になります。こと違って賑やかですし、一度足を運んでみてはいかがですか」

「ありがとうございます。貝は諦めます」

わたしは深々と頭を下げ、そそくさと帰り支度を始める。

人がたくさんいる場所に行くだけでも緊張してしまうというのに、浜辺は距離感がおかしい人たちというか、わたしには眩しすぎる人種が集う場所と聞いている。

貝の採集に行くとしても、わざわざ昼間に行く必要はない。人が減る夜に、こっそり行くことにしよう。

「へー、街の反対側にも浜辺があるんだね！」

その時、わたしとエドヴィンさんのやり取りが聞こえたのか、マイラさんたちが嬉々とした表情で近寄ってきた。

「はい。そちらは人も多く、飲み物や軽食を販売する店も多数出ているそうですよ」

「エリンさん、聞いた？　せっかくだし行ってみようよ！　ここも静かでもいいけど、賑やかな場所もいいよね!？」

……いえ、よくないです。

「エリン先生、私、どんなお店があるのか気になります！」

……わたしは気になりません。

太陽に負けない笑顔で誘ってくるマイラさんとスフィアに、脳内で突っ込むも口には出せず。

助け舟を出してくれないかと、二人の背後に立つクロエさんに視線を送るも……彼女はスフィアたちと同じ笑みを浮かべるだけだった。

「というわけで、みんなで行ってみよう！」

どういうわけなのかさっぱり理解できないうちに、わたしはマイラさんとスフィアに左右の手を掴まれてしまう。

「いえ、あの……」

そして一切抵抗できないまま、ずるずると引きずられていった。

それからわたしたちは、もう一つの浜辺を目指して街の中を進む。

人出が多い場所とあって貴族のオリヴィア様たちは同行できなかったけど、賑やかな街の様子に、わたし以外の三人ははしゃいでいる。

「あれはお土産物屋さんでしょうか？」

「観光案内所……って書いてありますね。これだけ大きな街ですし、観光名所も多いのかもしれない」

「あっちにはフルーツジュースのお店があるよ！　暑いし、みんなで飲んでく？」

多くの人が行き交う街の喧騒に負けず、スフィアもクロエさんもマイラさんも声を弾ませる。

そんな彼女たちの後ろに隠れるように歩いていると、道行く人々の恰好が気になった。

薄い上着を羽織りつつも、皆が皆、移動中も水着姿だったのだ。

常に暑い海辺の街ならではの光景だけど、みんな、恥ずかしくないのかな。

今はわたしたちも同じような上着を着ているけど、正直言ってスケスケで、まったく肌を隠して

くれない。

……やっぱり恥ずかしすぎる。暑くてもいいから、普通の服が着たい。そうこうしていると、目的の浜辺に辿り着いてしまった。

「うぐっ……」

目の前に広がる光景に、わたしは立ちくらみがした。

砂浜の至るところに人の輪ができていている。どれもが友人や知人の集まりのようだ。

売店で買ったらしい飲み物を片手に、波音に負けない声量で会話に花を咲かせている人々とにかくにも人が多い。下手をしたら王都の帰宅時間帯より混んでいるかもしれない。

先程までのブライベートビーチとは、似ても似つかぬ状況だ。

「お、キミたち、この街は初めてかい？」

「よかったら、俺たちが案内してあげようか？」

……早速人が寄ってきた。

いい感じに日焼けした、男の人が二人。これはもしや、ガールハントというやつだろうか。

「あー、そういうのは間に合ってますのでー」

クロエさんが営業スマイルで誘いを一蹴する。

商人気質ゆえか、笑顔ながら凜とした態度で、きっぱりと断っていた。

「そ、そう？ 残念だなあ」

そんな彼女に気圧されたのか、男性たちはすぐと退散していく。

「うわー、ああいう人、本当にいるんだねえ」

「スフィアちゃんの教育に悪いので、やめてほしいんですけどね」

首をかしげるスフィアを横目に、クロエさんたちが愚痴をこぼす。

「お、可愛い子たち発見ー！」

また別の男性が馴れ馴れしく近づいてきた。

けれど、再び営業スマイルのクロエさんが鉄壁の守りを見せ、男性を撃退する。

……その後、何人もの男性がわたしたちに声をかけてくるも、全員漏れなくクロエさんに追いつかれた。

「困ったものですね。エリンさん、可愛いから狙われてますよ？」

「は、はい？」

何人目かわからない男性を追い返した時、クロエさんはため息まじりに言った。

「な、なんでわたしなんですか。それこそクロエさんやマイラさんを狙ってきたんじゃない……」

「違いますよー。あの人たち、みんなエリンさんを見ましたよー？」

クスクスと笑いながら、クロエさんが続ける。

「そ、そんな。わたしなんて、スライムが水着を着て歩いているようなものですよ。何かの間違いでは？」

「だーかーらー、必要以上に謙遜しない！ てりやー！」

「あああー！」

ついそんなことを口にした直後、マイラさんがわたしの羽織っていた上着を取り上げる。

「ちょ、ちょっとマイラさん、返してください……」

「むー、あたしたちの誰よりも立派なもの持つてるんだから、もっと堂々とすればいいのに」
自分を抱くように体を隠し、懇願するも……マイラさんは眉をひそめるばかり。上着を返してはくれない。

「ところでエリン先生、探している貝って、どんな形をしているんですか？」

仕方なく、そのまま浜辺に向かって歩いてみると、ふいにスフィアが聞いてきた。

「えっと、ミレー貝は指のような細長い形をしていて、砂の中に隠れているんです」

わたしは人差し指を立てながら説明する。

「りょーかい！ それじゃ、みんなで手分けして探そうよ！」

「そうですね！ 固まって探すより、散らばったほうが効率いいですし！」

マイラさんとクロエさんは名案とばかりに、今にも駆け出さんという勢いだ。

「あの、ミレー貝を見つけるには、ちよつとしたコツと道具が必要で……」

わたしが追加で説明しようとするも、やる気に満ち溢れたみんなの耳には届かない。

この状況で一人になれど？ それだけは絶対に嫌だ。なんとかしないと。

「か、貝はまだいいので。その、えっと……」

あたふたするわたしを、三人は頭の上に疑問符を浮かべて見てくる。

「も、もう少し、みんなと一緒に遊びたいな、なーんて……」

引きつった笑顔と一緒に口から出たのは、そんな言葉だった。

「そうだったんですね！ そうならそうと、早く言ってくださいよ！」

「わひゃ!？」

次の瞬間、スフィアが嬉しそうに抱きついてきた。

「本当だよー。それじゃ、まずはお店巡り！ あの屋台、気になってたんだー」

「そうですねー。天然塩を使ったサイダーって、どんな飲み物なんでしょうか」

スフィアに手を引かれたわたしの後ろを、マイラさんとクロエさんがニコニコ顔でついてくる。

……身から出た錆さびとはいえ、これはもう逃げられそうもない。

今は浜辺に人も多いことだし、ミレー貝は夕方以降、ほそぼそと集めることにしよう。

楽しそうな三人に囲まれながら、わたしはそう決めたのだった。

……わたしは人がいなくなるのを待ってからスフィアたちと別れ、再び浜辺に戻ってきた。

夕方までは愛を語り合う陽キャカップルがあちこちにいたけれど、日が落ちると姿を消した。

ようやく、ミレー貝探しに集中できる。

以前読んだ本によると、ミレー貝はその細長い形状を活かし、砂に穴を掘ほって隠れているという。巢穴に塩を入れると驚いて飛び出してくるので、それを捕まえるのだ。

「えーつと……」

わたしは明かりを手に、波打ち際へと目を凝らしながら進んでいく。

すると、指が入りそうなくらいの小さな穴がいくつもあった。これがミレー貝の巣穴かな。「あとは、ここに塩を入れて……」

見つけた巣穴に、塩を振りかける。少し待つと、細長い貝がニョキッと顔を出した。すかさず捕まえて、思いっきり引っこ抜く。

同じ作業を、巣穴を見つかるたびに繰り返す。

気がつけば、用意したカゴはミレー貝でいっぱいになっていた。

観光地だから、誰も採らないのだろうか。大漁だった。

「えへ……やったあ」

貴重な薬材がこんなにたくさん。わたしは小躍りしそうになるのを、必死に堪える。

ミレー貝は身もおいしく食べられるし、あとでクロエさんに調理してもらおうかな。

「これだけ採れば十分だよね……あれ？」

そんなことを考えつつ、帰り支度をしていると……風に乗って、人の声がした。

まさか幽霊？　なんて一瞬思っても、幽霊が出る時間にはまだ早いと自分に言い聞かせる。

どうやら少し離れた岩場から聞こえてくるようだ。

わたしは岩陰に隠れるようにして、様子を窺う。

「……これ、ミレー貝じゃねえぞ。まったく役に立たねえなあ、お前は」

「ごめんなさい……」

暗くてよくわからないけど、怒気を含んだ男の人の声と、怯えた様子の子どもの声がした。

「貝を見つけてくるまで、給料はなしだ。わかったら早く行け」

「う、うん」

直後、男の子がわたしの脇を駆け抜けていった。暗いこともあって、気づかれていない。

親子という感じではなさそうだし、いったいどういう関係なのだろう。

男の子が走っていった方角を見ながら、首をひねる。

……そうだ。ミレー貝を探しているのなら、わたしの貝を少し分けてあげようかな。

わたしはそんな考えに至り、男の子を探して浜辺へ戻ることにした。

浜辺を探すことしばし。波打ち際で這いつくばるように貝を探す男の子を見つけた。

「あ、あの」

「うわあっ!？」

背後から声をかけると、めちやくちゃ驚かれた。

「び、びっくりしたあ……お姉さん誰？　まさかオバケじゃないよね？」

「ち、違います。確かに髪は長いですが……それより、あなたはミレー貝を探してますよね」

「そ、そうだけど……ぜんぜん見つからないんだ」

男の子は半ばそで言って、再び砂を掘り始める。

「ミレー貝は砂の奥深くに巣穴を作って潜んでいるので、闇雲に探しても見つかりません」

「え、そうなの!？」

そう教えてあげると、男の子はガバッと顔を上げて、驚きの表情を見せる。